

【旧約聖書日課】出エジプト記 32章7～14節

7主はモーセに仰せになった。「直ちに下山せよ。あなたがエジプトの国から導き上った民は墮落し、8早くもわたしが命じた道からそれて、若い雄牛の銅像を造り、それにひれ伏し、いけにえをささげて、『イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上った神々だ』と叫んでいる。」9主は更に、モーセに言われた。「わたしはこの民を見てきたが、実にかたくなな民である。10今は、わたしを引き止めるな。わたしの怒りは彼らに対して燃え上がっている。わたしは彼らを滅ぼし尽くし、あなたを大いなる民とする。」11モーセは主なる神をなだめて言った。「主よ、どうして御自分の民に向かって怒りを燃やされるのですか。あなたが大いなる御力と強い御手をもってエジプトの国から導き出された民ではありませんか。12どうしてエジプト人に、『あの神は、悪意をもって彼らを山で殺し、地上から滅ぼし尽くすために導き出した』と言わせてよいのでしょうか。どうか、燃える怒りをやめ、御自分の民にくだす災いを思い直してください。13どうか、あなたの僕であるアブラハム、イサク、イスラエルを思い起こしてください。あなたは彼らに自ら誓って、『わたしはあなたたちの子孫を天の星のように増やし、わたしが与えたと約束したこの土地をことごとくあなたたちの子孫に授け、永久にそれを継がせる』と言われたではありませんか。」14主は御自身の民にくだす、と告げられた災いを思い直された。

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙 6章4～12節

4一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり、5神の素晴らしい言葉と来るべき世の力とを体験しながら、6その後、墮落した者の場合には、再び悔い改めに立ち帰らせることはできません。神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです。7土地は、度々その上に降る雨を吸い込んで、耕す人々に役立つ農作物をもたらすなら、神の祝福を受けます。8しかし、茨やあざみを生えさせると、役に立たなくなり、やがて呪われ、ついには焼かれてしまいます。

9しかし、愛する人たち、こんなふうには話してはいても、わたしたちはあなたがたについて、もっと良いこと、救いにかかわることがあると確信しています。10神は不義な方ではないので、あなたがたの働きや、あなたがたが聖なる者たちに以前も今も仕えることによって、神の名のために示したあの愛をお忘れになるようなことはありません。11わたしたちは、あなたがたのおののが最後まで希望を持ち続けるために、同じ熱心さを示してもらいたいと思います。12あなたがたが怠け者とならず、信仰と忍耐とによって、約束されたものを受け継ぐ人たちを見倣う者となってほしいのです。

【福音書日課】マルコによる福音書 14章43～52節

⁴³さて、イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダが進み寄って来た。祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。⁴⁴イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。捕まえて、逃がさないように連れて行け」と、前もって合図を決めていた。⁴⁵ユダはやって来るとすぐに、イエスに近寄り、「先生」と言って接吻した。⁴⁶人々は、イエスに手をかけて捕らえた。⁴⁷居合わせた人々のうちのある者が、剣を抜いて大祭司の手下に打ってかかり、片方の耳を切り落とした。⁴⁸そこで、イエスは彼らに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。⁴⁹わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。しかし、これは聖書の言葉が実現するためである。」⁵⁰弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。

⁵¹一人の若者が、素肌に亜麻布をまとしてイエスについて来ていた。人々が捕らえようとすると、⁵²亜麻布を捨てて裸で逃げてしまった。

見捨てた者たちを【こども説教のために】

礼拝の中で執り行われる「聖餐」のパンと杯は、洗礼を受けた信者だけがあずかります。まだ洗礼を受けていない人を差別したり、除け者にしたりしているではありません。まず洗礼を受けて、「神の子」と呼ばれるようになってもらいたいです。

洗礼は、イエス・キリストと結ばれることです。古い時代、洗礼を受けた人は、「白い衣」を着せてもらいました。キリストの「白い衣」です。キリストを着せてもらい、キリストと共に神の子と呼ばれるようになったのです。

それは、誇らしいことですが、悲しいことでもあるのです。なぜなら、わたしたちは、本当は「神の子」と呼ばれるのにふさわしい者ではないからです。神を知ろうとしなかったり、知っていても無視してしまったり、背を向けてしてしまうことが、なんと多いことでしょう。「神の子」というよりも、「神の反逆児」と言ったほうがよい者です。そのまま神から見捨てられても仕方ないところばかりの者なのです。そのわたしたちが「神の子」と呼ばれるのだとしたら、それはどこか悲しいことではないでしょうか。

弟子たちは、主イエスと共に歩んで来て、最後の晩に大切な食事を共にし、その最後の祈りのときに傍らに伴いました。けれども、主イエスを捕らえる者が来たとき、彼らは皆、主イエスを見捨てて逃げてしまいました。主イエスはどれほど悲しまれたことでしょうか。それでも、主イエスは彼らを見捨てられなかったのです。十字架で死なれた後、弟子たちの前に現れてくださり、共に居続けてくださいました。「神の子」とお呼びくださったのです。

一緒に食事をした者が…

日本基督教団は、10月第一日曜日を「世界聖餐日」と定めてきました。第二次世界大戦後に発足した世界教会協議会の呼びかけに応じて、行事暦の一つとして定めてきたのです。世界中の教会が「聖餐」によって一つになることを祈り願うためです。

「聖餐」は、キリスト者の一致のしるしとも呼ばれてきました。かつて教派間の対立が激しかった時代には、教派の異なる教会で聖餐にあずかることはできなかったのです。今でも、相互に聖餐にあずかることのできない教派教会があるのです。

教会の歴史は、使徒たちの時代から対立と分裂を繰り返してきた歩みでした。それと同時に、ただ主イエス・キリストというお方のゆえに一つであろうとしてきた歴史でもあるのです。使徒パウロは、その一致のしるしとして、「洗礼」を見ていました。「皆一つの体となるために洗礼を受けた」（Ⅰコリ 12:13）と言い、「洗礼を受けてキリスト・イエスに結ばれた」（ガラ 3:27）ことを思い起こすようにと呼びかけました。しかし、対立と分裂が激しかった時代には、互いの教会で授けられる洗礼を認めないということさえあったのです。

長い対立と分裂の時代を経て、この一世紀、諸教会は、一致を求めて互いに和解と一致の道を探ってきました。現在では、ほぼすべての教派間で、互いの教会で授けられる洗礼を認め合うようになっています。異なる教派の教会に入会しようとするとき、あらためて洗礼を受け直すということは無いのです。それでも、いまだに、聖餐を共にできない教会があります。

考えてみれば、わたしたちは、聖餐を共にしていても、教会が一つであると胸を張って言えない現実を知っています。あの弟子たちのように振舞う自分たちの姿を見ているからです。**弟子たちは**、主イエスと最後の晩餐を共にし、主イエスが祈られる傍らに身を置いて過ごしましたが、その余韻も冷めやらぬうちに、ユダの手引でやって来た者たちを前にして、**皆イエスを見捨てて逃げてしまった**のです。主イエスのことを「**知らない**」と言って、**呪いの言葉さえ口にした**のです（14:71）。わたしたちも、聖餐に共にあずかり、主の祈りを共に唱えていながら、後奏のオルガンが鳴り終わったとたんに、主イエスと共にあることを忘れ、まるで主イエスなど知らない者であるかのような振る舞いをしてしまうことがあるのです。

それは、仕方の無いことかもしれません。洗礼を受け、主イエスに従う者として礼拝に連なり、「神の子」と呼ばれるようになっていても、わたしたちは、なお欠け多い土の器にすぎない者たちなのです。そうだとすると、わたしたちは、開き直って過ちを犯し続けてよいわけではないでしょう。

亜麻布を捨てて

むしろ、わたしたちは、教会へと呼び集められ、礼拝に連なる者とされ、御言葉聞き、讃美を歌い、聖餐にあずかり、主の祈りを唱えて、ここから再び送り出されて行く、まさにそのときにこそ、「古い自分」を捨てて「新しい人」へと造りかえられるための静かなときを必要としているのかもしれませんが。たしかに、皆さんの中には、礼拝の終わりに後奏のオルガンが鳴りやむと静かに席を立ち、余計な会話をせずにお帰りになられる方がいらっしゃいます。礼拝後にご自分の中に静かなときを保って、「古い自分」を捨てる作業を続けていらっしゃるのかもしれませんが。

もちろん、コーヒータイムの交わりも大切なことでしょう。主イエスも、安息日の礼拝の後には、だれかの家に招かれて宴会の席に着かれるのが常だったのです。主イエスが宴席を大いに楽しまれたことは、福音書が繰り返し伝えています。ときには、そこでお互いの関係にとって良くないような行き過ぎたことが起こることもあるかもしれませんが、主イエスは、そういうことさえ神の御心を尋ねる機会として捉えられていらしたのです。

その意味で、わたしは、ユダという人物にどこか惹かれるところがあります。彼は「裏切り者」と呼ばれてきました。けれども、彼がしたのは、主イエスを人々の手に「引き渡した」ことです。弟子たちのもとから引き離し、他の人々のもとに引き渡したのです。ユダ自身の思惑がどうだったのか、わかりません。彼と取引した人々の思惑は、腹黒いものだったかもしれません。それでも、ユダは、弟子たちが独占していた主イエスを、他の人々に渡し、彼らにつながぐ役割を果たしたのではないか、と思うことがあります。

そういったことがあるとしても、わたしたちには、キリストの教会に招かれ、礼拝の営みに加えられ、そして、ここから再び送り出されて行く者として、どこかで一人静かになるときが必要なのでしょうか。「古い自分」を捨てて、「新しい人」へと造りかえられていくための時間を設けることが絶対的に必要なのでしょうか。

素肌に亜麻布をまとった一人の若者が、ここに伝えられています。名も知られぬ若者です。ただ、彼は、まとっていた**亜麻布を捨てて裸で**去って行きました。**亜麻布**は、主イエスが墓に葬られるとき、ご遺体を巻いた布です(15:46)。その若者は、「死」をまとっていたのです。そして、主イエスのもとから離れて行くとき、それを捨てて行きました。「死んだ自分」から抜け出して、裸の一人として、そこから出て行きました。主イエスを見捨てることを通して、彼は、「古い死んだ自分」を脱ぎ捨てました。裸の者、幼子のように何者でもない一人になったのです。彼は、「新しい人」を上に着させていただけなのでしょう。ただ、そのときを静かに待つ時間が、必要なのです。